

丹羽文雄文学全集 第二十一卷
南国抄 当世胸算用



丹羽文雄文学全集 第二十一卷

南国抄・当世胸算用

一九七六年五月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二・郵便番号 一一二二
電話 東京〇三〇九四五一一（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©丹羽文雄 一九七六年 Printed in Japan (文1)

目次

南国抄	7
当世胸算用	51
移って来た街	131
霜の声	153
町内の風紀	173
人生案内	205
隣人	241

太宗寺付近	257
浅草寺付近	287
鬼子母神界限	317
世帯合壁	347
洗濯屋	365
崖下	375
創作ノート	393

装幀 辻村益朋
写真・一九七一年、孫の本田千秋と

丹羽文雄文学全集 第21卷

南国抄・当世胸算用

南
国
抄

一

鈴の音が近付いてきた。静かな鈴の音のあいだには、御詠歌も聞えた。声は軒端に沿い、ゆっくりと通りすぎるのだが、聲音も聞えない。同行二人の、男の、年寄りのお遍路のようであった。ここは四国遍路の道順にあたっているので、昔と同じように八十八の寺々をまわる巡礼の絶えることがない。日に数回、乗合が通った。

乗合は町の歴史を揺すぶり、巡礼にも両側の家々にも白い埃をかむせて疾走するのだが、通りすぎると、町は前よりもいっそう静かになった。お遍路と鈴の音が、如何にもしっくりと似合った。古びた家並の顔は頑固に、乗合に対していい顔はしないのである。それと言うのも、立間川と国安川に抱かれた洛北の旧武家屋敷が厳として残っていて、それに続いた三小路三カ町の町方も依然として武家屋敷に味方して、老松と古城址を唯一の自分らの索引のように心得た、城下街の濃い香を固執しているせいもあった。

午後の二時頃、旧武家屋敷のあたりは真夜中のように静かになる。陽の照っていることが、何か途方もない錯覚のように思われた。蘇鉄の葉先がびくとも動かない。春の陽は庭一面に落ちてゐる。石畳も薄い茶色に変色しているのだが、おそらく明暦三年宇和島藩主の五子宗純公が、三万石でこの淀橋町に分知された時からのものであらう。摺り減らされるだけ、踏石は摺れている。南国の豊穠な土地の割には地面一帯がへんに白けて、乾いた感じであるのは、古びた町の言訳であり、歴史がその上の柔くて黒い地層を掃き捨てたせいであらうか。淀橋町は昔から、平坦な土地の恩恵をそれ程必要としないのであらう。それに代るものに、豊かな海岸線を持っている。西伊豆に似た海岸線である。魚族も豊富だ。数量では三津浜につぐと言われる。しかし、蜜柑だけは忘れてはならない。生糸は愛媛県下でも発祥の地と聞くが、罐詰業の盛んなのは海岸町にふさわしい。夕家千太郎の海産物の罐詰は、中国大陆に現在さかんに分散されている。日華事変の功勞者である。土地の人に言わせると、淀橋町は南海の文化街だという。中学校、女学校、幼稚園、病院など、小さい町の割には一応備わっている。海上は阪神瀬戸内海各港、九州土佐にも定期航路を持っているのだが、宇和島へ二里半、宇和町に三里余、松山へ四時間で届く自動車の恩恵は、却って何か立ち上りかけたこの町の生気を、中途から抜いてしまったよう

な脱落を感じさせるのである。

淀橋町は相変らず巡礼の鈴の音と、御詠歌にふさわしい城下街である。松橋を境に川下と川上に分れているのだが、城下街の感じは川上に濃い。現在もなお風霜に痛められて木目を晒した表札には、士族何某と書かれている。川下と川上とは、言葉つきも違った。うっかり川下の言葉を使おうものなら、川上では軽蔑をされる。軽蔑すること、見識を保っているようであった。ふところの豊かなのは川下であり、淀橋町の運命を露骨に預っている。川下には銀行が三つもあるが、川上では藩祖宗純公の思い切った土地設計を、いままなお持てあましている。井然たる街衢と土木治水の遺跡は、たしかに非凡を感じさせるのだが、乗合の走る県道に較べると、横町や裏道が思いがけなくゆったりと幅を取っている。道の片隅に畑を作ったところ、通行人は不便を感じないであろう。無用な広さを持つ道路が井然と走っている。川上の人々には、この広い、昔からなる道路に虐められているのだ。商店が発展しようともがいても不必要な道路の広闊さで復讐をされる。如何にも武家屋敷にふさわしい闊達な感じであり、がっしりと溝が出来ている。下水板には見事な石が無造作に使用されていて、綺麗な水が流れている。門の中から大小を差し替へつけた人間が現われて来ようとも、あたりの風景は、いきなり似合ってしまうのだ。人通りも少ない屋敷町である。

伝説が生きている。土地の色も、武家屋敷も、堤塘を綴る老松も、青い空も伝説の中に息づいている。氣候温和、人情醇朴というのが誇張であるならば、こすっからい人間になろうとしても、歴史と風土に抑えられて、思い切った悪党にはなりかねるところである。生活が烈しく動いていないのだ。まるで文字を持っていない人のように、野心の宿る場所がない。

東京から紙幣を作る器械を売りにきた。

「この巧緻、精確な器械は、長年の苦勞の結果漸く発明されたものであります。それだけに値段はうんと高い。しかしこの器械一台あれば、紙幣はいくらでも作れる。一人のお客に無理をして買って戴こうとは思わない。五人十人と組になって、各自それぞれに分担をして買って下さることを希望します」

髭をはやした立派な商人であった。商人は皆の見ている前で、複雑な器械を操縦して、忽ち手の切れるような十円札を十枚印刷して見せた。

「生憎と、もう紙が切れてしまった」

もしこの器械を買ってくれるならば、即日宇和島から紙幣の紙を送るというので、九人が十一円ずつ出し合って、紙幣を作る器械を買った。秘密の売買であることは、双方とも充分に心得ている。即日紙の届くのを待っていたが、その日の内に九人は警察に挙げられた。

それ程、古い昔話でもない。犬尾城と石城山を北と西に持ち、京の東山を思わせる石塙山の翠緑は昔と変りがなく、宇和海を南にもつ淀橋町の一面には、丁度空気のうんと希薄になったような空虚が漂っている。静かな町と一概に形容をしても、譬えようもなく時間のかかった静かな感じであり、都会生活者には実感が持てないくらいだ。自然の風土も動きのない、並外れた静かな空気に永くひたっている、調子が外れて、何か間抜けた色彩を帯びるものであるうか。

傘屋の前を、ある日の午後一人が通りかかった。傘屋は竹を割って、糊をねり、紙を貼りつけるまで全部自分の家でやり通す。家の中はひっそりとしてい、誰もいない時よりも、もっと冷たい静かな感じであった。通行人は何気なく障子の破れ目から中をのぞいた。柱時計の音がびっくりする程大きく聞えた。すると、その破れ目から一つの目が音もなくのぞいた。目と目が会った。そこに生物がいることを、互に認め合った。目と目とした目の色であった。老婆は針仕事をしていたが、表を通る足音がふつとやんだので、破れ目から覗いたものである。何かあたりのしいんとした空気に気がねしているような、互の眼付であった。

県道から少しはいった横町で、午前中、カルメラ焼が店を出した。硝子箱の中には三つ四つ焼けたのがはいっている。乗合が疾走すると、そこまで柔い、白い埃の風が舞っ

て流れた。カルメラ焼は黙々と、焼いている。午後の四時になっても、同じ姿勢で焼いている。それまでの永い時間のあいだ、取り立てて動いたものが皆無といった気配であるが、硝子箱の中にはカルメラ焼が一杯になっていた。

親子四人で、三十円もあれば、中流の生活であった。六、七十円を取るものは、町で数人である。もともと町立病院長の百五十円の月給は、例外であった。破の琴の師匠は、月二円五十銭の家に住まっているが、月謝が二円、十人の弟子で生活をたてている。芸者は三輪橋の松並木と向い合った倉庫の二階に、五、六人いる。右隣は確に倉庫になっていゐるのだが、芸者の置屋は庫二階でなくて、武家屋敷の長屋門であった。鏡台を並べて、川をへだてて犬尾城址に向き合っているのだが、床下は門であり、人々が入り出した。芸者の風紀は、概して良い。風紀を乱せば、いっぺんに町中に拡がってしまうからだ。客は主に病院の若い医師に限られていた。月末払いの習慣でなく、年二回の支払が昔のまま継続されていて、商工会員の家がぼつぼつ倒れていくのも皮肉である。

地理的に大阪が東京よりも近いのだが、大阪はそれほど魅力ではなかった。どうしたものか東京井が颯爽として、人々の耳を打つ。それを真似ることが、見栄でもあった。「昨夜は僕、余儀ない用が出来たので、とうとういけなかつた」

一つには、土地出身の山亀の東京に於ける豪奢な生活や、城のような山亀別邸が、人々の尊敬と憧憬の対象になっているせいだ。山亀は淀橋町に山亀製糸会社をもっている。また、淀橋町の自慢でもあった。山亀の一族は時たま淀橋に来ては、東京の魅力を垣間見せていくのである。彼らには一生かかっても手の届きそうにない東京の魅力であった。地理的にも気圧されている。

東京に出ている商人に宛てた手紙に、こんなのがある。土地の知識階級だ。

「終日、店に出て仕事をする。夜は床の中でものを考えている。犬尾城址の山藪には、新緑が萌え始めた。如何にも生氣を感じさせる。見てみると、詩情が湧く。

中央公論の問題作、読まぬ。雑誌を買っていたら、送ってくれ。改造、日本評論は送った。Bの『海風』は、八十枚というので買ったが、感心出来ない。読後感が浅い。Oの『阪神の宿』は刊行当時一読した。世態人情を辛辣に描きながら底に快い甘さが流れている。かような高度の甘さは、人々を感動させるに足りない。丁度奈良の仏さまのように。

古本通信販売の商売は、或は徒勞に終るのではないだろうか。僕は昭和×年から×年まで、ある必要から淀橋五カ町村の読書界の状況を調べたことがあり、大上書店の仕入書高によって見た。それによると読書階級は、殆んど皆無

といてよい。いまここに数字を挙げて説明することは出来ないが、小学校の先生なんか、本は読まないよ。他の先生だって、同断だ。だから僕は古本販売の計画を危ぶむ。円本流行はかなり以前の話だが、その流行の時には円本購読者延人員は通計七百人だ。勿論中途解約者も含むが、学校の先生、若い青年男女、それで読者は尽きる。しかし円本はかく読者層を開拓してくれたが、別の単行本や雑誌は、決して増加しない。東京でどのようなセンションを起していても、円本の読者は少しも買わない。読書階級は円本に始まり、円本で終わっている。

就職口を頼みたい。淀橋町では働く口にも働く口が見つからない。しかし現在の状態では、或は僕の上京熱も絶望だろうと考えている。それが本当だろうが、しかし……。

読みたい本を列記するから、君の手許にあったら送ってくれ、読んだら直ぐ返す。……」

折角知識熱に燃えていても、淀橋町ではそれに手を貸す手段が見つからない。町全体が退嬰的であり、恩給者が多いのである。希望を握り潰された思いや、恩給生活者の控えめな呼吸が川上の町々には幽鬼のように漂っている。年三百円も恩給があれば多い方であり、金瑠璣草の恩給も、おろそかには出来ないのだ。

御殿橋の松並木に面した滝田卯之助の家は、武家屋敷の内であったが、最近改築をした。別に恩給生活者でもない

い。兄の滝田剛平が淀橋町第一の金持であり、町の三分の二が剛平から高利な金を借りている負目から、人々は卯之助の改築もよく言わなかった。卯之助が税務署に勤めていた頃、築港の埋立に賄賂を取ったからだと噂している。

現在では、細君のおきたをモデルにして油絵を描いている。毎年東京の展覧会にはおきたの裸体を送るのだった。入選したことがない。写真のような、丁寧な裸体画である。自分でも写真の巧緻な目を追っているのだが、写真機の魔力から目を外して、別な見方をしようとは思ひもやらない。俳句も作る。淀橋町は和歌と俳句が盛んであるが、如何にも城下町の素養としては、品のよい道楽であった。盆栽にも凝っている。夏など、税務署まで二、三丁は離れているのだが、陽除をしに自宅まで帰ってきた。何百鉢となく蘭の鉢がある。筆で一枚一枚丹念に消毒をしてやるのだが、筆を使っている時の顔付は、カンバスに向っておきたの肌の色を引き写そうと努力する真剣な色と同じである。

「花が、こうしてやると、女のようにお礼を言いますよ」

切花は絶対にしなかった。家人にも許さない。

「人間の首が取れるものか」

器用であり、彫刻もする。出品作品の額ぶちは、自作であり、秋虫をとらえると、虫の家を作ってやる。家にはニスを塗り、緻密な芸術品を作り上げるのである。字も達者

であった。俳句は他人にも教えていた。

家族は五人で、すみ子、きし子、茂の順で、卯之助は背が高く、若い頃から美貌であった。おきたは年をとる毎に肥って来るが、色が白い。

自分のいつもある部屋は、絶対に掃除をしなかった。それでいて、ぶしう者ではない。一種の形式主義者である。

「うちの座敷は箒を使ったことがないから汚いと、世間で噂してますよ」

「そういう訳の判らない奴がいたら、連れておいで。芸術家とはどういふものか、その理由を話してやるからな」

骨董品にも趣味は寄せていたが、売る時に損をしない程度の計算が立たなければ買わなかった。自然を何よりも大切な心構えとしている。おきたはいれ毛をしていたが、寝た時、抜けて枕許に落ちた。卯之助が隠した。

「髪が薄くなって、頭のとっぺんが禿けて、地が透いて見えるのは見つともない」

「いれ毛するよりは、まだましだ」

「その内には一本も毛がなくなりましたよ」

「一本も毛がなくなろうと、その方が自然だ。いれ毛は断じて許さないよ」

細君の頭が全部禿げた時の恰好は、想像出来なかったけれど、頭全体が薄くなりうす赤く透けて見える分には差支

えないのである。いれ毛を抜き取ると、おきたの頭髮はびたりと地肌に伏せてしまうのだったが、そんな頭で、マチスやルノールと同じポーズを卯之助は要求するのである。年々おきたの体は崩れて来ていたが、崩れて来るのもまた自然であり、卯之助の目は相変らず細君を撫でていた。

茂が三つの時であった。当時卯之助は小学校の先生をしていた。町でも指折りの金持の分家に唐紙屋があり、未亡人がいた。肺を病んでいた。卯之助より年上であったが、恋愛をした。

「長男は父親の責任だから、茂は一緒につれていく。お前にやるものは、二人の娘と、この家屋敷だよ」

卯之助は唐紙屋に婿入りすることになった。しかし、おきたと合意の上で別れることは出来なかった。いずれ血腫い愁嘆場は起るものと、覚悟していたのだ。

「土族のあんたがそんなことをしたら町のいい笑ひ者になつてしまふだけです」

「土族と土族の結婚だ。町方のものがどういおうと、平氣だ。羨しいのだらう」

「あんた正氣で、あの唐紙屋の後家と一緒になるつもりですか」

「どうしても一緒になるつもりだよ」

行李三つと、茂を連れて、卯之助は婿入りする日取を極

めた。双方の親戚には結婚披露の招待状を出し、その当夜、まるで自分が追い出されていくような形で家を出た。

町ではすでに噂になっていたので、小学校は辞職している。茂を膝の間にに入れて、俵に乗り、中之番所橋にさしかかると、突然石が飛んで来た。夜分なので、犯人はよく判らなかったが、小石は降るように飛んで来た。橋の向うにわあっ、わあっと喚声が挙り、車を通すまいと邪魔をしていることが判った。叫び声から、子供達であることも知れた。

「誰だ、石を投げるのは？ わしは滝田卯之助だ。卯之助を承知で石を投げてよこすか」

俵引があと戻りを始めた。

「旦那、いけませんよ。これじゃとても渡り切れません。目玉の一つは潰されないことには、無事にお嫁さんとこに行けませんよ」

卯之助は膝の茂をしっかりと抱いて、暫く子供の群に怒声をあびせていたが、子供達の背後に大人のいることを感じると、

「仕方がないから、一度引き返そう」

小石は猶も飛んで来た。うしろ向きの俵の背に当って、ぽこんという音を立てた。茂は小さくなって、震えている。卯之助は目に見えない相手に向って、頻りと怖い顔が続けるのだったが、背後から波のように歌声が押し寄せて来